
ハウンド

パンサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハウンド

【Nコード】

N5297P

【作者名】

パンサー

【あらすじ】

「俺は、なんでも屋のアルバイトをしている。

給料のわりにやってることわりにあわねえしおまけに寝不足ときた。しかも毎回くる仕事と言えば……………」

(前書き)

中学のとき書いた小説ですちよつとまだ青い部分があります。

俺の名前は 勇次

高校2年 喫茶店でバイトをしている

で今店長のマスターと今、ホテルの廃墟の中を走っている。
ドデドデ

「おい、もっと早く走、追いつかれるぞ！勇次」

「マッ、マスター俺もうだめだ」

「がああ・・があがが」

「う、うわああああ、助けてマスター」

後ろからものすごいスピードでゴーストがやってくる。

「勇次とにかく走れ、あと少しであいつから逃げられる。」

「そんなこといってももう限界です。ハッハッ」

息切れが止まらない

普通喫茶で働いているはずの俺が何でこうなっているかとゆうとマスターは、裏で何でも屋をやっている！でも来る仕事は、幽霊たいじばかりだ！俺は、その仕事に毎回のようにつきあわされている、そのせいで幽霊のことには、ちよっとくわしい

「ああああがあうおー」

「お、おいつかれたー」

「勇次耳をふさげ！」

「え！」

「早くふさげ説明は、後だ」

マスターの言われたとおりに耳をふさいだ

「ああがが」

「それでも食らえ化けもん」

マスターが何か投げた。

カン、カン、バシユン

投げたものがいきなり爆発したそのとき

「ぎあああああ」

ゴーストが悲鳴をあげている。

「勇次今のうちに逃げるんだ。」

「はっ、はい」

俺は、また走り出した。

「ところでマスター何を投げたんですか？」

「ああ、あれか最近俺が開発した聖水のグレネードだ。」

「ああ……さっきはよくも……」

「また追ってきましたよ！聖水のグレネード効いてなかったんじゃないんですか？」

「おい俺を馬鹿にするなあれは、ちゃんと効くはずだ。」

「マスター試作品じゃだめじゃないですか」

「まだ開発中だったんだよ」

「あおだふおあうえかおいが」

後ろからゴーストがさっきの倍のスピードで追ってくる。

「マスターほかになんかもってないんですか？」

「そんなもんじゃない」

「えーじゃどうするんですか？」

「逃げる」

「どこへ？」

「外に逃げる外、あいつらは、外には、出られない月の光が苦手なんだ。」

「マスター今日月出ていません。」

「え！！そんなはずはないここへ来るとき見たぞ」

「しっかりしてください、ほら窓の外」

「え！あ、ああああああ……出てない月が出てない。」

「どうするんですか？」

「よし最後の手段だ」

「なんですか最後の手段って？」

「あの窓から飛び降りる」

「え、ここ三階ですよ」

ときどきむちゃくちゃなことを言い出す。

「じゃあーゴーストの餌食になりたいか？」

「それは、ごめんですけど・・・跳とぶんですか三階から？」

「いやならいい一人でここに残ってる俺は行くそれ」

バリイイイン

マスターは、ほんとに窓から飛び降りた。

どさごろごろ

「いってー」

「マスターだいじょうぶですかー？」

「勇次お前人の心配してる余裕あんのか？」

「え？」

「ゴーストだもうおまえの後ろに来てる」

「ががあああああああば」

「うっわわわわ」

そのときマスターがピストルをかまえた！

バン、バン

「ぎああああー」

ゴーストが消滅した。

「勇次大丈夫か？」

「なんとか、でもなんでそんなもん持っているんですか？」

「勇次ごめんベルトに塩のマグナムを隠していたの、すっかり忘れていた。」

「忘れていたじゃないですよ」

「わりー」

マスターは、かなり忘れっぽい性格だ

「あやまってすむ問題じゃないですよ。今日の仕事きっちり残業代払ってもらいますからね」

「わかってる」

わかっているといいながらいつも残業代を払ってくれない。

うつすら空が明るくなっている

「マスターそろそろ帰りませんか？」

「そうだな」

「マスター玄関で待っていてください」

「すぐこいよ」

「了解」

私は、玄関に向かって歩き始めた。

仕事上喫茶店の客や学校の生徒そしてオカルト好きの人たちから俺は、妙な名前を付けられた

俺のもう一つの名前 ハウンド

THE

NEW

REQUEW

新たな依頼

俺は、マスターの車で家までおくってもらった。

「じゃ6時に遅れずに店こいよ」

「わかっています。」

「じゃあな」ぶううううう

マスターは、そう一言、言ってどこかへ行ってしまった。

俺の詳しい自己紹介でもしておくか

俺の名前は、澤野 勇次

今高校二年

趣味は、寝ること食べること

ちなみに一人暮らし

好きな食べ物は、パエリア

そろそろ寝るでも

けっこうそら明るくなってきたな今何時だ？ふと腕時計を見た。

朝の六時十三分

「げ、やばいもうすぐ学校始まるよ!」

俺は、急いで家の中に入った。

そして学校に行く準備をした。

寝る時間がまったくなかった

「寝ないで学校行かなくちゃいけないのか」

俺は、うんざり気分で学校へむかった。

学校へ行く途中

「たぶん俺今日寝てないからまともに授業受けられないな」
こんな予想をしていた。

この予想は、予想では、すまされなかった

「ぐぐぐぐ」

「またあいつ寝てる!そろそろおこすか?昼だし」
バシ

「がーごがは………いってー」
たたかれた

「痛いじゃないよ」まさよし

そこには、友達の昌義がいた。

「え!授業は?」

「寝てたんだよたんだよ!」

「まじかよ!」

「そろそろテスト近いんだからましめに授業うけろよ!」

「俺昨日寝てないんだよ」

「お前またあのバイトか!」

「そう、昨日は、ものすごく大変だったんだから」

「あのバイトは、やめたほうがいいぜ」

「まあ考えとくよ」

「そうだもう昼だぞ!」

「じゃあパンでも買いにいくか?」

昌義と売店に向かった

「勇次こんど俺もつれてつてくれよ幽霊たいじに」

「馬鹿いってんじゃないよ」

「楽しそうじゃん」

「昌義お前は、なにもわかってない」

売店についた

「じゃあ俺これフランスパンのソーセイジ入り焼き」

「じゃあ俺も」

昌義と同じ物をたのんだ。

おぼちゃんが「二つで840円ね」

「はい420円」

「あいよ」

昌義が先に支払いをすませた。

俺も財布の中をあさった、あれ？たりない

「昌義20円貸して」

「は？」

「20円貸して金足りねーんだ」

「お前返すか？」

「返す返す」

「返せよ、ほら」

昌義がいよいよやながら20円を貸してくれた。

「おぼちゃんはい420円」

「あいよ」

売店を出た

「じゃあどこで食べる？」

「中庭だろ」

昌義と中庭へ行った。

「じゃあ食べるか？」

「おう」

がぶ・・ばいいいばいい
かぶりついたフランスパンが良い音をはなった。

「フランスパンうっめー昌義も早く食べてごらん」

「おう」

がぶ・・ばりいいいい

「ほんとだ、なんかパンと中のソーセイジがマッチしてる!!!。」

「そうだろそうだろ、うまいだろ!」

昌義とパンの感想や、最近のことについて話していて

フランスパンを3分の2くらい食べ終わったころ

同じクラスで学年一位といってもいいくらいの美貌の持ち主で金持ちの冬木麻美が俺に向かって話かけてきた。

「ねえ・・・話があるんだけどいい?」

心の中で話して何まさか・・・いびきがうるさいってもんく言いにくたのかな?

「まっ、昌義ちょっといつてくる」

中庭のはじめで彼女の話聞いた。

「話して何?」

「あの・・・こんなこと聞くのは、馬鹿みたいなんだけどさあなんだ? いびきのことか?」

「あなた幽霊たいじ本当にしているの?」

「まあそうだけど」

はぁーまた幽霊たいじの依頼かー

「あの・一つたのみたいことがあるんだけどいい?」

「なに?」

「病院の廃墟に他校の友達と行ってきたんだけど廃墟では、幽霊出なかったけど家に帰ってから妙なことはっかりおき始めたんだ。」

「たとえば?」

「電気が急に消えたり・・かなしばりにあったり・・電話がかかってきて電話の相手が変わる人の叫び声だったり・・・。」

これは、ちょっと危ないな

「もう一人の友達が変わったことあったの?」

「変わったことは、彼氏ができたことぐらいだって」

「でおはらいは、してもらったの？」

「うん・・・でも効果なかった。」

「で俺のところに」

「うん」

「じゃあ今日喫茶店来て。」

「わかった・・・」

なんと彼女からの話しは、幽霊たいじの依頼だった。

「じゃあ、後でいくからね」

「あ、はい」

一言いい彼女はさっていった。

昌義がこっちに来た。

「勇次話ってなんだった？」

「告白」

「うそ・・・あの麻美さんが？お前に」

昌義が変なテンションになっている

「うそ」

「お前ふざけるな」

「ごめんごめん」

「本当の話しの内容は？」

「幽霊たいじ」

「まじで」

「なんか出るんだって」

「てことは、冬樹さんと心霊スポットデート？」

「違うよ」

「勇次お願いつれてって」

「だめだよ」

「そこを何とか」

「だめ」

「お前がなんと言おうと俺は、いく」

「勝手についてきて迷子になっても知らないよ」

「いいの？」

「勝手にいつてくるぶんには」

「やったーデートだ」

「だからデートじゃないから」

昌義は、なに勘違いしているんだ？幽霊たいじは、遊びじゃないんだからな

「おい昌義そろそろ教室戻ろうぜ」

「ああ」

昌義と教室へ戻り午後の授業を全部なんとか寝ずに受けてバイト先に向かった。

「やったーデートだ、デート」

昌義は、本当に幽霊たいじに来るらしい

「だからデートじゃないって」

こいつは、ほんとにしょうもない男だ

「仕事のじゃまはするなよ」

「はいはい」

昌義がせかす

「早く行かないと麻美さんもう来ているかもしれないからさ」

「あ、ああ」

走って喫茶店に行った。

「マスターて、ことです。」

依頼の説明をした。

「依頼は、引き受けるが何で昌義がいるんだ？」

昌義は、前マスターに告白の手伝いをたのみ・・・その先は、言わないでおこう

「俺、告白の手伝いだったらもう二度とやんないぞ」

「マスター違います。幽霊たいじにつれてってください」

「なに馬鹿げたことを言っている。死んでも知らないからな」

「えっ！じゃあついていってもいいんですか？」

「かってにしろ」

ガッチャン ドアが開いた。

「今日は、よろしく願います。」

「うん、そこらへんに座って」

「はい」

「マスタークライアントが来ました。」

マスターは、麻美の顔を見ると
バシッ

「お前クライアントが来たのにお茶の一杯も出さないのか」

「今すぐもってきます。」

いつもならクライアントが来てもお茶などは、出さない俺は、コーヒーを入れに行った。

「で依頼の内容は」

コーヒーを入れている昌義が来た。

「お、麻美さん今日も」

「しっ、依頼の内容が聞こえない」

「……」

「ここの近くにコード病院の跡地に最近友達といってきたんですよ」
コード病院……あのばかでかい総合病院か最近新しい場所に新しい病院を建てたんだっけ

「で、入院病棟に行ったらちっちゃなミニカーが落ちていて友達がこの車

結構いい値段で売れるらしいよって家にもって帰ってきたのその引から変な電話がかかってきたりもう大変なんです」

「よし今からコード病院にいくか」

「よろしく願います。で依頼料は……」

「あなたの作った料理一品で引き受けましょう」

「私チャーハンぐらいしか作れません」

「料理一品なら何でも結構、勇次必要なものを車につめてくる」

「コーヒーは、」

「いらない」

あんたがお茶入れろって言ったから……なんだよ依頼量料理一品手何

「これ飲む？」

麻美と昌義にコーヒーを差し出した。

「でもなんで昌義がここにいるの？」

「偶然このコーヒーが飲みたくなったんだ」

なーにがこのコーヒーが飲みたくなったからだ、こいつ、にがいのだめなくせに

「勇次砂糖、砂糖どこにあるんだ」

「あそこのテーブル」

「勇次準備が出来た。」

キキキイイブルン

俺たちは、車に乗った。

俺は、あえて麻美さんの隣に座った。なぜかって麻美さんを昌義とマスターから守るためだそれにしても話す話題がない外でも見てるか

「ねえ」

「はいっ」

うわ話しかけてきたよ

「何でいつも授業中寝てるの？」

「それは……」

正直に明けがまでマスターに毎晩こき使われているからなんて答えたら俺がマスターにたいじされる

「それは……俺、夜行性だから」

「うふふ、なかなか面白いこと言うのね」

俺だって夜寝たい

「そろそろだ」

前方に不気味な施設がそびえたっている。

「うわこんなところに行くのかよ」

「昌義なにビビッているんだよ」

「別にビビッてないし」

「勇次これ」

マスターにマグナムと弾数発を渡された。
ベルトにマグナムをさした。

「いざ狩へ」

ハンティング

「ふっ・・・だめマスターあかない」

「勇次こっちだ」

「マスターおいていかないでくださいよ」

俺が正面玄関をこじ開けようとしている途中にどっか行くのは、ひどい

「ばか普通に考えたら正面玄関閉まっているだろうが」

ギィィドスン

「うわ、ドアノブサビてる」

ドアノブがさび付いていた以上にびっくりしたのは、病院の中だ真っ暗で懐中電灯をつけていないと何にも見えない
キッ、キッ、キッ

病院独特の足音がする

「勇次それにしても薄きみ悪いな」

「昌義そんなにくつつくな」

ピッピッピッ・ピッピッピッ

「誰かのケータイなっている勇次お前か」

「違います」

「私です。」

ピッピッ

「もしもし」

「ガハッがハッ」

幽霊か？

「麻美私、のど痛いからのど飴帰りに買ってきて」

「わかった」

「だれから？」

「お母さん」

ピッピッピッ

「まだだ、ちよつとごめん、お母さん・・・」

「フフフフッフフフねえぼくのZZZZZZ返して返して返して返して返して返して」

「いゃー」

「ちよつと変わって」

マスターが電話を奪い取った。

「誰だ」

「返して返して返して返して冷凍保管室で待ってるから」ぷつ
ツーツーツーツーピッ

「マスターなんて」

「冷凍保管室で待っているって」

「私たち、殺されちゃうでしょう」

「大丈夫安心して」

「でも」

「幽霊は、人を殺さない人を殺すのは、人間だけだ」

「マスターどうします？ 冷凍保管室に行きますか？」

「ミニカーは、入院病棟にあったんだ罠に違いない」

「じゃあ二つのチームに分かれていこう」

「じゃあいろいろと危険なんで俺は、麻美さんと組むマスターと昌義で冷凍保管室に行つて」

「勇次ばかりずるい」

「昌義お前ばかかお前は、マスターと行動しろマスターそれで言い
ですね」

「わかった麻美さんケータイ貸してくれる」

「はい」

「これで幽霊から電話が来ても大丈夫だ」

「連絡は、ケータイで」

「ああ」

俺と麻美さんは、入院病棟にいきマスターと昌義は、冷凍保管室にむかった

「麻美さん何か見つけたら教えてください」

「わかりました」

それにしても薄気味悪いさつさと家に帰ってー

入院病棟に付いた。

「何回の何号室」

「たしか3階の4号室」

4号室についた

「今から4号室にはいるよ」

カシッ

銃をかまえながら部屋に入った。

パジャマを着た男の子が立っていた

こいつこつちをじっと見つめている

「麻美さんミニカーを」

「はいっ」

「これ」

俺は、子供にミニカーを差し出した。

子供は、それを受け取ると

「人のものを勝手にとっちゃいけないよ」

「ごめんなさい私が取ったんです」

「いいよあやまったから」

やけに素直だなこの幽霊

「もうここを出たほうがいいもう一人の僕が来る」

「え！」

「デビルのほうのぼくが」

うわさには、聞いたことがあるが幽霊の中には、一人の人間から2人の幽霊が生まれることがある。善と悪エンジェルエンジェルのほうは、危害を加えないがデビルのほうは、普通の幽霊の何倍もの力があるそして一番恐ろしいのは、人の善の心を吸ってしまうのだ。

マスターたちが危ない電話をかけた

「マスター聞こえますか俺です勇次です。」

「ああ、勇次こっちは、何にもなかった。」

「うわさ話のデビルがいたんです。」

「なに」

「そこから逃げてください」

「わかった・・・勇次」

「何ですか」

「車で待っている」

ピッ

「勇次、おそい」

「返えせ返えせ」

「どうするんですか」

「え、もちろん決まっているだろう倒すんだよ」

「何倍も強いって・・・」

カシッ

「こっちには、ショットガンがあるんだ」

バシユン

「どうして、どうして、どうして、どうして」

「やばい、逃げろ」

冷凍保管室を出た。

カシッ バシユン カシッ バシユン

「勝手な都合でぼくを」

「全然効いてない」

カシッ バシユン

「そんなに急いでどこに行くの」

「うわー行き止まりだ」

「昌義もうどうにも出来ない」

「待って待って・・・」

一歩ずつ近づいてくる

「もうだめだ」

「デビルやめるんだ」

「え、エンジェルなぜここにいる」

もう夜中の12時をまわっている

「ん？勇次来てくれたのか」

「あたりまえじゃないですかマスターのパートナーなんですから」

「あの子は」

「エンジェルのほうです。」

これでやっと家に帰って寝られる

「帰るか」

「マスターまだやり残していることが・・・」

「何だあいつらのたいじか」

「違います。この病院には、裏があつたんです。」

「裏？」

「この子が死んだのは、2年前そのころ病院の院長が肝臓が悪くなつてこの病院に入院していた。肝臓のドナーは、見つからず日に院長は、弱っていく一方だった。そんなある日この子が交通事故にあつて救急車ではこぼれてきた。強く頭を打つていてもうどうしようもなかった。で院長がこっそり肝臓を自分の肝臓と取り替えたわけ」

「そんなことがあつたのか」
「でこれが証拠の資料、エンジェルこれを後は、マスコミに渡してくる。」

「ありがとう、・・・おにちゃんこのミニカーおにちゃんが持ってた」

そう言うのとデビルとエンジェルは、消えた。

「俺もう来たくない」

「だから昌義やめとけつて言ったのに」

「私は、ここで働いても良いかな」

「もう遅いから帰ろうこの証拠をマスコミに流してから」

一時間目

「おい見ろまた勇次寝てる」

「勇次だけじゃない麻美さんも昌義もだ」

「いったいどうしたんだ」

「さあ」

今夜のできごとは、四人だけの秘密だそして俺のポケットの中には、ミニカーが入ってる。

学校帰り喫茶によった。

「乾杯ー」

「きーやっぱり仕事の後のサイダーは、最高だ」

「お前は、何にもしていないだろ」

「まあね」

「チャーハンできたよ」

熱々のチャーハンが運ばれてきた。

「どうぞ」

「いただきます」

ん！いまいち

「どう」

「まあ美味しいかな」

正直には、いえなかった

「テレビつけよう」

「コード病院でこんなことがありました。・・・ここで臨時のニュースです。クローバー学園の生徒60人が行方不明になりました。繰り返します。クローバー学園の生徒60人が行方不明になりました。」

1話終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5297p/>

ハウンド

2010年12月16日19時09分発行